

児童・生徒用成功恐怖測定尺度 (FSSC) の作成

筑波大学心理学系 岡 島 京 子

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 桜 井 茂 男

Construction of "Fear of Success Scale for Children (FSSC)"

Kyoko Okajima and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

Fear of Success Scale for Children (FSSC) was constructed to identify success-fearers according to Canavan-Gumpert, Garner, & Gumpert (1978), Okajima, Sakurai, & Katsukura (1983), and Nakayama, Abe, & Takanono (1983). The scale contained 20 items in the yes-no format. A total of 216 fourth through ninth graders completed it, and its component traits, reliability, and validity were examined. There were no sex or grade differences in scale points. Three factors out of seven in all as obtained by factor analysis were understood as the same ones as those of Canavan-Gumpert et al. (1978), and the rest were not interpretable. This scale was found to have high reliability in both internal consistency and stability and also high validity in relation with the Japanese edition of Perceived Competence Scale for Children (Sakurai, 1983).

Key words : fear of success, motive to avoid success, competence, achievement behavior, sex difference.

成功恐怖 (fear of success) あるいは成功回避動機 (motive to avoid success) についての研究は、Horner (1968) によって本格的にはじめられた。彼女は、成功回避動機を「競争場面での成功が負の結果を導くであろうという恐怖 (1969, P.38)」と概念化し、女性特有の動機として達成動機に関連する枠組の中で検討してきた。成功回避動機は、主に、性役割 (sex role) の観点から女性に特有の動機と考えられてきたが (Horner, 1968; Spence, 1974; Good & Good, 1973; Zuckerman & Allison, 1976)、近年、男性にも認められるという報告 (たとえば、Hoffman, 1974) もあり、この観点からの成功回避動機へのアプローチには、問題点が指摘されている。

これに対して、Pappo (1972)、Cohen (1974)、Canavan-Gumpert, Garner, & Gumpert (1978) らは、成功恐怖*を Freud にはじまる精神分析学の立場から捉えた。彼らは、子どもの自立に対する親の神経症的な不安が、子どもに取り入れられ、それが子どもの達成行動を阻害することにより、成功恐怖が生起するものと考えている (中山・安部・高野, 1983)。すなわち、彼らのいう成功恐怖とは、幼児期に起源をもつ一種の神経症的性格特性といえよう。

Canavan-Gumpert et al. (1978) は、Pappo (1972)、Cohen (1974) および彼ら自身の研究を詳細に検討した結果、成功恐怖者について次のような特徴を指摘している。

① Horner (1968) が提唱した性役割観にもとづく成功回避動機とは異なり、性差は認められない。

② 自己のコンピテンス (competence) を過小評価する傾向があり、自尊感情 (self-esteem) は全般的に低い。

③ 不安は全般的に高い。

④ 競争や評価されることに敏感である。

⑤ 成功恐怖反応は、成功への接近に伴って強まるが、当該達成行動の終了あるいは回避により弱まる。

岡島・桜井・勝倉 (1983) および中山ら (1983) は、Pappo (1972) と Cohen (1974) による成功恐怖尺度を、わが国の社会・文化状況に照らし合わせて再構成し、その信頼性と妥当性を検討した。その結果、40項目から成る日本語版成功恐怖測定尺度 (Fear of Success Scale: FSS) が作成され、高い信頼性が認められた。妥当性については、Canavan-Gumpert et al. (1978) の指摘に沿って、測定尺度の因子分析により内部構造が、達成動機づけや自尊感情などの測度との相関分析により諸概念との関係が、また、高・低成功恐怖群によるたぐみ実験により成功経験後の両群の反応の違いが明らかにされ

*以後、Horner らの文脈では成功回避動機、Pappo, Cohen, Canavan-Gumpert らの文脈では成功恐怖、という用語を区別して使用する。

た。そして、Horner (1968) が論じる成功回避動機とは、異なる点が示唆された。

我々は、以上のような成人についての知見にもとづき、成功恐怖の研究を児童・生徒にまで拡張することを意図した。そこで、まず本研究では、児童・生徒用の成功恐怖測定尺度 (Fear of Success Scale for Children: FSSC) を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを試みる。子ども用の成功恐怖尺度は、すでに Canavan-Gumpert et al. (1978) が作成を試みている。本研究では、この尺度に準拠して、日本語版が作成される。また、妥当性については、桜井 (1983) が作成した認知されたコンピテンス測定尺度により、主に、コンピテンスと成功恐怖の負の関係が検討される。成功恐怖理論では、既述したように、幼児期に成功恐怖の起源があるとされている。そこで、児童・生徒にはかなり安定した形で成功恐怖の存在が予測される。したがって、児童・生徒の成功恐怖を測定することは、理論の吟味にとってきわめて重要であると考えられる。さらに、本邦にはこの種の測定尺度は開発されておらず、今後の研究の基礎になるものと期待される。

方 法

被調査者 小学4年生から中学3年生までの児童・生徒216名 (男子107名, 女子109名) で、彼らは茨城県水海道市の公立S小学校およびM中学校に通っていた。被調査者の構成の詳細は、Table 1 に示されている。

Table 1 被調査者の構成

学年 \ 性別	男	女	全体
小学4年	18	15	33
5年	18	17	35
6年	15	14	29
中学1年	17	18	35
2年	20	21	41
3年	19	24	43
全 体	107	109	216

(人)

質問紙 Canavan-Gumpert et al. (1978) に示されている子ども用の成功恐怖測定尺度 (Children's Fear of Success Scale) 58項目をなるべく忠実に日

本語訳し、これを原案として、心理学専攻の大学院学生2名が文化的差異により日本では一般的でない内容を含む項目や日本語としての表現がおかしい項目などを修正・削除した結果、55項目が適切な項目として残された。回答形式は、原版にもとづき、「はい・いいえ」の真偽法が採用された。成功恐怖を表現している反応に対しては1点が与えられ、それらの得点を合計して、成功恐怖得点が求められた。

手続き 1982年1月、本質問紙が、上記被調査者に、クラスごとの集団で実施された。また、同時に、妥当性の検討のために、小学6年生と中学1年生に、桜井 (1983) の認知されたコンピテンス測定尺度が実施された。この尺度は、Harter (1979, 1982) に準拠して開発されたもので、コンピテンスが4つの領域、すなわち、①学習に関するコンピテンス (cognitive competence)、②友人関係に関するコンピテンス (social competence)、③運動に関するコンピテンス (physical competence)、④生活全般に関するコンピテンス、すなわち、自己価値 (general self-worth) に分けて測定される。質問紙などの実施者は、クラス担任の教師に依頼された。これらのデータにもとづき、20項目から成る児童・生徒用成功恐怖測定尺度 (Fear of Success Scale for Children: FSSC) が作成され、内部一貫性と妥当性が検討された。3か月後、FSSCの再テスト法による信頼性 (安定性) を検討するため、中学1年生 (このときは、中学2年生) を対象に、同質問紙が再び施行された。なお、データの分析は、おおむね筑波大学学術情報処理センターのSPSSによって行われた。

結果と考察

(1) 測定尺度の構成

性差や学年差の可能性を考慮して、性や学年の要因をコントロールした項目-全体偏相関が求められた。この値が、.30以上の項目20項目が抽出され、最終的な児童・生徒用成功恐怖測定尺度 (略して、FSSC) とされた。なお、Pearsonの積率相関でも、ほぼ同じ結果が得られた。この20項目で、新たに項目-全体偏相関が算出された。この結果と項目内容、平均 (M)、標準偏差 (SD) が、Table 2 に示されている。各項目に「はい」と反応すると1点が与えられる。逆転項目は、5項目中1項目も残らなかった。平均は、.20~.78、標準偏差は.42~.50、項目-全体偏相関は.33~.56の範囲にある。最初の55項目の合計得点とこの20項目の合計得点の相関は、.91 ($p < .001$) であった。FSSC得点の平均は11.36、標準偏差は4.16、範囲は1~19であった。FSSC

Table 2 FSSC 項目の平均、標準偏差と項目-全体偏相関

No	項目内容	M	SD	項目-全体偏相関*
1	ゲームで勝っているとき、夢中になってミス (あやまり) をしてしまうことがよくあります。	.58	.49	.43
2	たとえ他の人がやっても、自分はみんなの前で、手品をしたり、歌をうたうことははずかしくてできません。	.47	.50	.43
3	勉強をはじめると、すぐに勉強以外のことを考えだします。	.56	.50	.36
4	まわりの人から注目されると、いやな気分になります。	.65	.48	.44
5	勉強をしようとする、とつぜん、他にやりたいことを思い出すことが、たびたびあります。	.69	.47	.41
6	自分が悪くないのに、あやまることがときどきあります。	.52	.50	.37
7	先生にあてられると、正しい答えを知っていても、ときどきして不安になります。	.72	.45	.41
8	よいことがあると、つきには、悪いことがあると思います。	.60	.49	.52
9	何かをやろうとするとき、まわりの人かがどう思っているかが気になります。	.73	.45	.38
10	ゲームで勝ったとき、自分の力で勝ったのではなく、相手がミスをしたからだと思うことがよくあります。	.44	.50	.50
11	自分でできることでも、まわりの人にたいしては、「できない」と言うことが多い。	.46	.50	.46
12	はじめてあった人の前では、いつもの自分のようにふるまうことは、むずかしい。	.75	.43	.41
13	尊敬している人からほめられると、妙に不安になります。	.27	.45	.35
14	自分にやさしい問題は、だれにでもやさしいと思います。	.78	.42	.33
15	「よくできた」と言われると、つぎのときもそうできるかどうか不安になります。	.66	.47	.56
16	多くのことをのぞむと、かならず失敗し、らくたんします。	.71	.46	.48
17	ものごとがうまくいっているとき、それをだいなしにしてしまうことをするのはないかと、不安になります。	.64	.48	.52
18	いそいで大事なしゅくだいをしなければならぬとき、時間が気になって、うちこめません。	.40	.49	.47
19	ゲームでもうすぐ勝つというとき、しばしば他のことを考えはじめます。	.20	.40	.42
20	ゲームでもうすぐ勝てるというとき、ミスをおかしやすくなります。	.53	.50	.56

* 性と学年の要因をコントロールした項目-全体偏相関である。

得点分布の百分率ヒストグラムが、Fig. 1 に示されている。やや高得点側へ傾斜している。

(2) 性差

FSSC の男子の平均得点は11.74 (SD=4.26)、女子の平均得点は10.98 (SD=4.04) であった。t 検定の結果、性差は認められなかった ($t=1.34$, $df=214$, $n.s.$)。これは、理論通りの結果であった。

(3) 学年差

FSSC 得点について学年要因による一要因の分散分析を実施した結果、学年差は認められなかった ($F=1.92$, $df=5/210$, $.05 < p < .10$)。したがって、成功恐怖は、少なくとも児童期以後はかなり安定した性格特性になっていると考えられる。ただし、

Fig. 2 に学年別の FSSC 平均得点の変化が示されているが、これによると、小学4年生と6年生、小学4年生と中学2年生の間の FSSC 平均得点の差はかなり大きいように思われる。本研究では、各学年の被調査者の数が多いとは言い難いので、今後さらにデータを収集して再分析することが重要であろう。

(4) 因子分析

FSSC 20項目について、因子分析 (主因子法、固有値=1, →バリマックス回転) が行われた。この結果は、Table 3 に示されている。まず、主因子法により固有値1以上の7因子が抽出された。この7つの因子により、全分散の56.4%が説明された。また、第1因子だけでも全分散の48.6%が説明された。

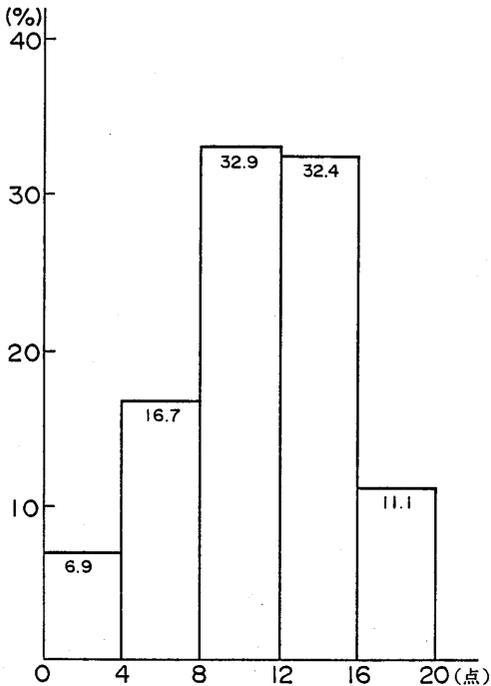


Fig. 1 FSSC 得点分布の百分率ヒストグラム

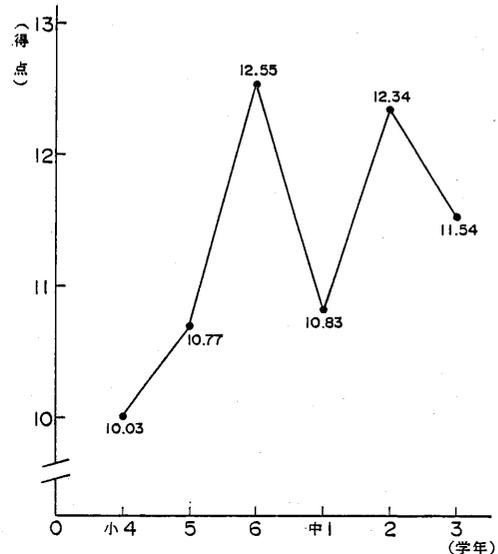


Fig. 2 FSSC 平均得点の変化

この7因子についてバリマックス (varimax) 回転が施された。第1因子は、「7. 先生にあてられると、正しい答えを知っていても、どきどきして不安になります」、「12. はじめて会った人の前では、いつもの自分のようにふるまうことは、むずかしい」などの項目が高い負荷量をもつことから、他者による評価の懸念を表す因子と解釈される。第II因子は、高い負荷量をもつ項目が最も多く、「8. よいことがあると、つぎには、悪いことがおこると思います」、「4. まわりの人から注目されると、いやな気分になります」などが比較的高い負荷量をもつことから、いわゆる成功恐怖反応の因子と言えよう。すなわち、主に、達成行動の成功後に生起する成功恐怖 (不安) やその予期に関する因子である。また、これには他者による評価に敏感であることが前提となっている。第III因子は、「20. ゲームでもうすぐ勝るといふとき、ミスをおかしやすくなります」、「1. ゲームで勝っているとき、夢中になってミス (あやまり) をしてしまうことがよくあります」の2項目のみがきわめて高い負荷量をもつことから、達成に対する否定的反応の因子と解釈できよう。第II因子が成功後の不安を問題としているのに対して、第III因子は成功前の否定的反応を問題にしている。いずれにしろ、この2つの因子は、成功恐怖者の反応過程に関

係していると言えよう。

第IV因子以下は、負荷量が割合低かったり、他の因子と重複して負荷を示す項目が多かったり、因子の解釈が困難である。これらの因子に高い負荷量を示す項目をみると、「17. ものごとがうまくいっているとき、それをだいなしにしてしまうのではないかと、不安になります」のように典型的な成功恐怖を示す項目、「11. 自分でできることでも、まわりの人に対しては、「できない」と言うことが多い」という自己のコンピテンスを否定してみせようとする項目、「5. 勉強しようとする、とつぜん、他にやりたいことを思い出すことが、たびたびあります」や「18. いそいで大事なしゅくだいをしなければならぬとき、時間が気になって、うちこめません」というように注意集中の障害を示す項目、「14. 自分にやさしい問題は、だれにもやさしいと思います」というように自己のコンピテンスの低い評価を示す項目、などが含まれている。したがって、項目では、Pappo (1972) や Cohen (1974) が抽出した因子内容を十分含んでいるが、因子としてはいまだ未成熟といえよう。しかしいずれにしても、成功恐怖に典型的な①他者による評価の懸念 (第I因子)、②成功前の否定的反応 (第III因子)、③成功後の不安 (第II因子) を示す因子は解釈できた。これらは、

Table 3 FSSC の因子分析

No.	主因子	因子 (varimax 回転後)*							h ²
		I	II	III	IV	V	VI	VII	
1	.41			.57					.39
2	.39	.52							.32
3	.29						.31		.21
4	.38		.46						.34
5	.36						.49		.31
6	.27					.30			.17
7	.35	.55							.33
8	.50		.52						.41
9	.36				.34	.59			.56
10	.44		.30						.22
11	.41					.49			.34
12	.39	.54							.36
13	.26		.34						.14
14	.27						.44		.23
15	.55	.31	.31		.42				.42
16	.45						.35		.26
17	.56				.70				.61
18	.45							.70	.58
19	.37		.30						.19
20	.55			.64					.53

* .30以上の負荷量が示されている。

Canavan-Gumpert et al. (1978) の子ども用測定尺度の因子分析でもほぼ同じ結果であった。

(5) 信頼性

質問紙項目の内部一貫性を推定するクロンバックの α 係数は.78, 3か月後の再テスト法による安定性係数は.75 (N=31) で、いずれもかなり高く、信頼性は確認されたといえよう。ただし、 α 係数は、Canavan-Gumpert et al. (1978) の場合は.84であり、本資料の方がやや低い。

(6) 妥当性

桜井 (1983) の認知されたコンピテンス測定尺度と FSSC 得点との相関係数は、学習に関するコンピテンスで $r = -.48$ (N=60, $p < .001$), 友人関係に関するコンピテンスで $r = -.23$ ($p < .05$), 運動に関するコンピテンスで $r = -.22$ ($p < .05$), 自己価値で $r = -.29$ ($p < .05$) であった。この結果は予測を支持している。また、学習に関するコンピテンスとの負の相関はかなり高いが、その他の相関は有

意ではあるが低い相関である。成功恐怖が性格特性である点は一応認められる。しかし、知的達成に関係する領域と最も強く結びついている点も明らかにされた。今後は、この他の妥当性についても組織的に検討する必要がある。

要 約

Canavan-Gumpert et al. (1978) の研究にもとづき、児童・生徒用成功恐怖測定尺度 (Fear of Success Scale for Children: FSSC) が作成された。この質問紙は、20項目で構成され、「はい・いいえ」の真偽法による回答形式をとる。性差および学年差は認められなかった。因子分析では、7因子が抽出され、そのうち3因子は①他者の評価の懸念を示す因子、②成功後の不安を示す因子、③成功前の否定的反応を示す因子、と解釈された。これらは Canavan-Gumpert et al. (1978) の結果とほぼ同じであった。残りの4因子は、解釈が不可能であった。信頼

性については、内部一貫性および安定性とも、十分であった。妥当性については、桜井(1983)の認知されたコンピテンス測定尺度との負の相関が検討され、予測が支持された。

引用文献

- Canavan-Gumpert, D., Garner, K., & Gumpert, P. 1978 *The success-fearing personality*. D. C. Heath.
- Cohen, N. E. 1974 Exploration in the fear of success. Unpublished doctoral dissertation. Columbia University.
- Good, L. R. & Good, K. C. 1973 An objective measure of the motive to avoid success. *Psychological Reports*, **33**, 1009-1010.
- Harter, S. 1979 *Perceived competence scale for children* (manual). University of Denver.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, **53**, 87-97.
- Hoffman, L. W. 1974 Fear of success in males and females: 1965 and 1971. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 353-358.
- Horner, M. S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situations. Unpublished doctoral dissertation. University of Michigan.
- Horner, M. S. 1969 Fail: Bright women. *Psychology Today*, **2**, 36-38 ; 62.
- 中山勘次郎・安部一子・高野清純 1983 成功恐怖測定尺度の妥当性の検討 筑波大学心理学研究, **5**, 67-74.
- 岡島京子・桜井茂男・勝倉孝治 1983 成功恐怖概念の検討と測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, **5**, 59-65.
- Pappo, M. 1972 Fear of success: A theoretical analysis and the construction and validation of a measuring instrument. Unpublished doctoral dissertation. Columbia University.
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成 教育心理学研究, **31**, 245-249.
- Spence, J. T. 1974 The thematic apperception test and attitudes toward achievement in women: A new look at the motive to avoid success and a new method of measurement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 427-437.
- Zuckerman, M. & Allison, S. N. 1976 An objective measure of fear of success: Construction and validation. *Journal of Personality Assessment*, **40**, 422-430.